



マイ クリスチャン ヒーロー

ロバート・リーマー

来日して間もない頃、私は長崎にある「日本26聖人記念館」を訪れた。そこには16世紀に当所で処刑された26聖人の遺品、聖骨だけでなく、キリシタン迫害時代を偲ばせる書籍・書簡類が多数展示されていた。殉教の丘で殉教者の身の回りの品々を目の当たりにし、畏怖と共に言葉では言い尽くせない感動を覚えた。展示品の一つ一つが時を越え語りかける、正に時代の生き証人と言えるほどの力を持って迫ってきたのである。その力の前にただ言葉もなく立ち尽くすことしかできなかったことを、昨日のこのように覚えている。たとえ微小な断片であろうと、それは20世紀に生きる我々にとって大いなる恵みと言えるだろう。殉教者を悼む縁となるだけでなく、その偉業に直接触れ、確かめることができるからである。

その後、今世紀に日本で活躍したキリスト者についても知る機会が訪れた。1961年にはイエズス会の著名な教育者であるヘルマン・ホイヴェルス神父と夕食を共にでき、また焦土広島で被爆者の救済に尽くしたイエズス会のペドロ・アルペ神父と会話を交わすこともできた。そして、マクシミリアノ・コルベ神父やアリの町のマリアと呼ばれた北原怜子氏、混血孤児の母として生産を捧げた沢田美喜氏、ゼノ神父と呼ばれ親しまれたゼノ修道士等現代のクリスチャン・ヒーロー、ヒロインとも言うべき人々について知識が深まるにつれ、ここにも信仰と他者の幸福のために我とわが身を捧げた人々がいたのだという感動が心のうちに広がっていった。他にも名もない多くの人々が、日本とキリスト教との出会いにささやかかかも知れないが重要な役割を果たしたに相違ない。そうした人々の業績を調査・研究しようとする学者や学生は、これから何世代にも互って大勢輩出することと思う。その時、本学の図書館の「カトリック文庫」が彼らに大いに益するだろうことは、想像に難くない。

南山大学図書館は今、日本近代のキリスト教史を俯瞰することのできるコレクションとして「カトリック文庫」を形成する仕事に取り組んでいる。日本の中央に位置するカトリック大学が、このような作業を行うことは、誠にふさわしく、時宜にかなったものである。しかも近代に的を絞ったということは他大学のコレクションに抵触せず、原本を入手しやすいという意味でも、先見の明があったと言えよう。この「カトリック文庫」によって本学の図書館は日本の学界でさらにその名を高めることと信じて止まない。

(Robert RIEMER : 外国語学部英米科教授)

聖歌集について

栗山 義久

多数寄贈いただいた資料のうち、今回は聖歌集を取りあげてみたい。宣教活動が再開された明治初期からの聖歌集の歩みを辿ることは、カトリック布教史上大変重要であり、また当時の典礼観を知る上で各種聖歌集は貴重な歴史資料になりうると思うからである。

なお、さかばやし功氏は聖歌集の歴史を、Ⅰ.初期聖歌集普及期(明治初頭～)、Ⅱ.統一聖歌集普及期(昭和初頭～)、Ⅲ.改訂聖歌集普及期(昭和41年以降)、Ⅳ.典礼聖歌集普及期(第二バチカン公会議以降)の四期に分けておられる。1) この解説に沿って、主に、Ⅰ、Ⅱ期に属する文庫所蔵の聖歌集を紹介したい。

Ⅰ. 初期聖歌集普及期(明治初頭～昭和初頭)

明治12(1879)年、プチジャン師(Petitjean, Bernard Thadee, 1829-1884)の手になる『おらしよ ならびに おしえ』の付録『きりしたんのうたひ』が初の聖歌集(歌詞のみ)と言われている。残念ながらこれは未所蔵ではあるが、以後明治期にはパリ外国宣教会の宣教師ルマレシャル、ラゲ、マルモリエ、ドーマンジュール各師の編集により8種を数える聖歌集が刊行されている。1)

資料1 . 『日本聖詠』ルマレシャル編集 三才社 1907(明治40)年

A 5版 317p. 154曲収録

< 青山玄師寄贈 >

左頁に曲、右頁に伴奏譜があり、少数のグレゴリオ聖歌のほかは、フランス風の聖歌が大半で日本語の歌詞がローマ字で付されている。他に、1922(大正11)年版<聖母訪問会寄贈>もあり。

ルマレシャル師(Lemarchal, Jean-Marie-Louis, 1842-1912)により、明治19年に一般信徒のための聖歌集『聖詠』と『天主教教会^{ラテン}拉丁文聖歌』が刊行された。『聖詠』は歌詞のみであるが、典礼暦に沿った聖歌はもとより、聖母や天使また諸聖人をたたえる聖歌だけでなく、日常生活の祈りやミサをはじめとする典礼儀式における祈り、教義を織込んだものなど154曲収録されている。2)

この『聖詠』に、明治22年伴奏譜を加えて宣教師やオルガニスト用に出版された聖歌集が『日本聖詠』である。

伴奏はパピノ師(Papinot, Jacques-Edmond-Joseph, 1860-1942)の編曲による。

この他同師により、『聖詠』と『天主教教会^{ラテン}拉丁文聖歌』の歌詞の合本と推定される『公教会聖歌』(明治36年)、『天主教教会^{ラテン}拉丁文聖歌』の楽譜付きグレゴリオ聖歌集と推定される『公教会^{ラテン}拉丁歌集』(明治39年)が刊行されている。

資料2 . 『公教会^{ラテン}羅甸歌集』 ラゲ編集 改訂増補再版 1917(大正6)年

228p. ㌥15 × ㌥11cm

< ベリス・メルセス宣教修道女会寄贈 >

上段にラテン語歌詞のカタカナ書き、下段は日本語の歌詞。洒水式、大祝日入祭文、ミサ通常文、葬儀用のほか、聖体降福式用の聖歌59編収録。

続いて、聖母訪問会の礎を築いたラゲ師(Raguet, Emile, 1854-1929)により、『公教会拉丁歌集』が明治36年に出版されている。³⁾ あいにく本書は無いが、上記『公教会羅甸歌集』はその改訂版と推定される。

一方、ドーマンジェール師(Demangelle, Henri-Anatole-Wilhelm, 1868-1929)により、マイ塊塾(現在の東京大司教館内にあった)から、同塾生のために『公教聖歌』が明治44年に出版されている。

資料3 . 『公教聖歌』アンリ ドマンジェル編集 マイ塊塾 1911(明治44)年

B6版 262p. 176曲収録 < ベリス・メルセス宣教修道女会寄贈 >

聖母聖月と付録の二部に分け、前者には聖母マリアに関するラテン語、フランス語、日本語の聖歌を。そのうち日本語聖歌は聖母聖月に用いるもの19、ルルドの聖母マリアに参拝するために用いるもの14編。付録は祝日、聖体降福式の聖歌である。

以上はパリ外国宣教会によるものであったが、続いて来日した他の宣教会や修道会が各地での布教に伴い独自の聖歌集を出版している。ここではまず、フランシスコ会、神言会の宣教師の手になる大変珍しい『公教会聖歌集』を紹介しよう。本書が生まれた状況について、『カトリック大辞典』に以下の記述がある。

「これ等[まで]の聖歌集は全て聖歌隊用であったが、本来の意味の聖歌への要求が益々高まり、信者一同に国語で歌われ、かくて当時の札幌教区では読誦ミサと主日並びに祝日とに用いる聖歌が著名な西洋の聖歌に倣って作られかつ歌われるに至った。」

資料4 . 『公教会聖歌集』

1918(大正7)年

68p. ㌥19.5 × ㌥13cm 北°-版 96曲収録

< 青山玄師寄贈 >

日本語歌詞の聖歌および慣用的なラテン語聖歌(グレゴリオ聖歌を含む)96曲が収録され、ドイツ風の曲が多い。また、「オルガン及びハルモニスタ用」と副題に付されているが、線譜を使わず独自の数字付楽譜を用いていることも大きな特長の一つである。⁴⁾

本書は、フランシスコ会シリング師(Schilling, Dorotheus)が編集し、新潟教区長ライネルス師(Reiners, Joseph, 1874-1945)⁵⁾ が校訂して大正7年(1918)に出版された。札幌、新潟両教区で公式に採用され、昭和5年までに五版を重ね広く親しまれた。

また、『カトリック大辞典』には、続いて「その他新潟では同教区用の特殊の聖歌を加えたいま一つの聖歌集が出版された。」とあるが、これは下記の『カトリック聖歌集』を指すものと思われる。初版は資料4 . と同じく大正7年に刊行されている。

資料5 . 『カトリック聖歌集』ヨ・デイトリヒ編 第4版 新潟カトリック教会発行

1931(昭和6)年 161p. ㌥15 × ㌥11cm 116曲収録 < ドミニコ会観想修道会聖ヨゼフ修道

院奇贈 >

『公教会聖歌集』に20曲余りを追加。同様の数字譜付。また、同じ聖歌にも一部編曲の手が加えられている。

昭和に入り、長崎教区からバチカン版グレゴリオ聖歌楽譜に基づいた本格的な聖歌集『カトリック羅典聖歌集』が出版(昭和6年)された。本書は長年にわたって全国の小教区、神学校、修道院などで用いられ、聖歌教育に大きな貢献を果たした。2)

資料6 . 『カトリック羅典聖歌集』 5版 長崎カトリック司教館 1954(昭和29)年

B 6版 264p. 110曲収録 < 聖母カテキスタ会寄贈 >

典礼暦の主要な祝祭日を歌ミサ形式で執行できるように、グレゴリオ聖歌によるミサ固有式文と5種類の通常式文および聖体降福式用讃歌を収録。

4線譜を用い旋律とリズムはバチカン版に従っている。

・統一聖歌集普及期(昭和初頭～戦後)

これまでの日本語聖歌は、個々の宣教師に依存した形で編集(フランス風、ドイツ風に大別される。ただし、典礼に固有の聖歌はグレゴリオ聖歌のみ)されて来たが、全国共通に用いられる聖歌集編集の要請が起こってきた。その経過については『カトリック大辞典』に以下の記述がある。

「昭和3年、東京に開かれた司教会議は一般聖歌集の編纂を決定し、福岡の司教ティリー、サレジオ会会長チマッティ及び光明社のノル(Hougolin Noll)を編纂委員に任命した。しかしながら、司教ティリーは間もなく死亡、チマッティは日本を去ったので、この事業は主としてノルが当たり、彼は大神学校のアノージュ(Anoge Antoine)及び多治見の神言会修道院のディトリヒ(Dietrich)の協力でこれを成就した。」2)

こうして生まれたのが『公教聖歌集』(昭和8年)で、昭和15年までに五版を重ね、戦前戦中を通して統一聖歌集として用いられた。また、本書の伴奏譜『聖歌伴奏譜』も昭和10年に刊行されている。

資料7 . 『公教聖歌集』 再版 光明社 1934(昭和9)年
273p. 16.5 × 11cm 234曲収録 < 聖母カテキスタ会寄贈 >

フランス・ドイツ系の曲がほぼ同じ割合で、ミサや聖体降福祭に歌われるラテン語聖歌も収録されている。付録に歌詞小註あり。

資料8 . 『聖歌伴奏譜』 光明社 1935(昭和10)年
129p. 27 × 19cm < 後藤文雄師、カトリック恵方町教会寄贈 >

他に、ヨゼフ・ディトリヒ(神言会)、ゼノ・フレック(フランシスコ会)両師の手になる改訂増補版(昭和26年) < 後藤文雄師寄贈 > もあり。

資料9 . 『公教典礼聖歌集』 光明社編 中央出版社発行 1943(昭和18)年

B 6 版 301p. <カトリック鹿角教会、カトリック秋田教会寄贈>

主要大祝日の固有式文や通常式文のグレゴリオ聖歌をソレームの方式によって五線譜に書き替えた。前述の『カトリック羅典 聖歌集』と共に全国的に用いられた。第一部ミサ聖祭、第二部讃歌。他に、3版、4版あり。

こうして統一聖歌集は全国的に普及していくが、時と共に問題点や欠陥が指摘され始めた。こうした動きが昭和30年代に司教協議会で「聖歌集改訂委員会」を組織し、9年に及び改訂作業を経て『カトリック聖歌集』(昭和41年初版)に結実(第 期)。また、第二バチカン公会議の典礼憲章公布を期して、典礼の国語化の促進と共に『典礼聖歌』の編集(第一集を昭和43年に刊行)へと引き継がれ(期)、現在に至っている。

また一方で昭和前期には特色のある聖歌集も個別に編集されている。ここでは神言会ヴァイペルト師(Weipert, Joann) 編纂による『聖夜の調べ』を紹介しよう。これは多くは "Indulci Jubilo(St. Gabriele)"より翻訳した38曲のクリスマス聖歌集で、昭和16年8月に謄写版で印刷されている。主に神言会が管理する東北各地の教会で個々に印刷しクリスマスに用いられたと推測され、手元には、鶴岡カトリック教会発行<カトリック主税町教会寄贈>、米澤カトリック教会発行<カトリック鹿角教会寄贈>、新潟カトリック教会発行<カトリック秋田教会寄贈>の3種が残されている。米澤、新潟カトリック教会発行の聖歌集は、神言会ギュツロー師(Gutzloe, Josef)が、"グロリア"、"御子あれましぬ"の2曲を加えプリントした増補版に当たるものである。

また、本書は昭和16、25年にエンデルレ書店より『聖夜の調べ クリスマス聖歌集』として別に刊行されている。昭和25年版(増補版)は、ギュツロー師によりさらに1曲追加され41曲収録している。

以上明治期から昭和前期にかけての聖歌集の歩みを辿って来たが、最後に紹介できなかった聖歌集およびグレゴリオ聖歌に関する著作についてまとめて記しておきたい。

* 『公教聖歌集』 エミル・ヘック著 浪速印刷(印刷)

1925(大正14)年 <後藤文雄師寄贈>

* 『公教聖歌集 名古屋教区用附録』 ヨゼフ・デエトリヒ編 光明社

1936(昭和11)年 <カトリック主税町教会寄贈>

* 『フランス聖歌集』 パリーミッション会編 音楽之友社

1953(昭和28)年 <聖霊奉侍布教修道女会(秋田)、カトリック新潟司教館寄贈>

* 『合唱聖歌集』 ヴィンチェンソ・チマツティ、フェデリコ・バルバロ編 ドン・ボスコ社

1954(昭和29)年 <聖霊奉侍布教修道女会、カトリック松本教会寄贈>

[グレゴリオ聖歌関係資料]

* 『グレゴリアン聖歌に於けるリズムと小節』 ポール・アヌイ著 公教大神学校

1938(昭和13)年 <東京大司教館寄贈>

* 『グレゴリオ聖歌の研究 第一號』 グレゴリアン音楽学会編発行

1950(昭和25)年 <東京大司教館寄贈>

* 『ソレム楽派によるグレゴリオ聖歌の歌ひ方』 テ・ラローシュ著 岳野慶作訳

中央出版社 1951(昭和26)年<聖霊奉侍布教修道女会(秋田)、聖母カテキスタ会寄贈>

注1)さかばやし功「カトリックの典礼音楽の歴史と現状」(『礼拝と音楽』 18) 1978年

2)「日本カトリック歴史大事典」 教文館 1988年

3)「カトリック大辞典 3巻」『聖歌』 富山房 1952年

4)この聖歌集と数字付楽譜については、名古屋音楽大学4年の小林真理子さんが卒業論文を作成中と聞く。

5)初代名古屋教区長。1907年神言修道会に入会。1909(明治42)年来日し、初代新潟教区長を経て、1920年聖心愛子会(現聖心の布教姉妹会)、1932年南山中学校、1936年南山小学校(41年名古屋市に移管)を創立した。

(Yoshihisa KURIYAMA : 学術情報課)

お詫び

南山大学カトリック文庫通信カトリックNo. 2 に掲載しました「資料寄贈者一覧」に、聖母訪問会本部が抜けておりました。ここに慎んでお詫び申し上げます。

【編集後記】

南山大学図書館も11月より新システムが導入されたおかげで、このカトリックの編集作業も新しい機械での作業になり、操作マニュアル片手に慣れない手つきで取りかかりました。こうして第3号も予定通り産声を上げた訳で、これまでより美しく仕上がったのではないのでしょうか。(M.M.)

カトリック文庫資料収集の基本姿勢と近代カトリック研究資料について二つの貴重な原稿を頂いたことを感謝いたします。(Y.O.)

今回より編集委員に新メンバーを加え、編集作業もスムーズに進みました。今年が平和な年になることを願って第3号を送り出します。(T.Y.)

南山大学図書館カトリック文庫通信
カトリック 第3号 1995.1.1発行
南山大学図書館「カトリック文庫」プロジェクト
編集委員：山田豊明，三浦 基，尾形裕司
〒466 名古屋市昭和区山里町18
TEL：052(832)3163
FAX：(G3)052(833)6986

(タイトルデザイン：平松富美)